

平出大信 (一八七〇—一九二四)

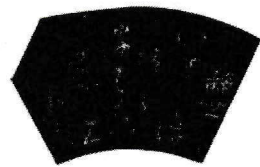
ひらいで
だいしん

明治の教育者。安政四年北小河内村(現箕輪町東箕輪)の村木茂八の男に生れ、後平出家に入り、明治十年教員検定試験に合格し、小河内小学校を始めとして、南箕輪・東箕輪を歴任して、明治二十九年に西箕輪小学校長、三十五年に東箕輪小学校長となり、後、四十一年河南小学校に転じ、明治四十四年職を退いて家塾を開き、村内の青年を指導した。彰徳碑は北小河内の中村にある。大正三年十二月五十九歳で歿した。

平澤宇源治 (一八五〇—一九〇六)

ひらさわ
うげんじ

幕末の自治功勞者。文政八年六月野底村(現伊那市)の彦左衛門の二男に生れ、幼名を宇右衛門、諱を伝周、耕斎と号し、改名して宇源治といった。若い頃江戸に出て



須田翁の門に入って、漢学を修め帰郷して家督を相続し、更に高遠藩の儒者中村元起(別項)について学んだ。安政五年(一八五八)野底村の名主となつて村治に励み傍郷

村の子弟を自宅に集めて教育した。その頃は丁度幕末の混乱期で藩主内藤頼直が將軍

家茂に従つて長州征伐の軍に加わつたが、その際宇源治は夫役として働き、明治五年、その功によつて家格の証として弓箭を賜つた。同年学制頒布につき学校世話役を申付けた。他村の同役と共力して常門寺に始めて学校を開いた。第二十六小学校である。ところが野底村では通学距離が遠いことから、筑摩県知事へ小学校分離を請願し認可を得て、上牧村等持院に明道小学校を開いた。この時、彼は学事係として校長を兼ねた。又校舎の新築等を行い、明治十二年まで七ヶ年間動続した。村治については農業用水に關してしばしば県庁へ陳情して、認可を得、箕輪の三日町から水路「新井」を掘鑿してその結果二十余町歩の新田が開発されるに至つた。又、沢山入会権問題について村の為に奔走し、犠牲となつて警察に七十日間留置されたこともあった。その後伊那郡村の村會議員となり、議長となつて村政に携つたが明治十四年辞任し、以後は悠々自適の生活を送り、明治二十九年七月七十二歳で歿した。(野底村誌。墓碑銘) いざさらば清く浮ばん運の上(辞世)

平澤嘉造 (一八三〇—一九〇六)

ひらさわ
かぞう

寺子屋師匠。天保元年飯島に生れ、通称を嘉右衛門、幼名を米五郎、俳諧の号を万賀といつた。飯島謙斎(別項)について漢学と習字を学び、後しばらく江戸に出て研鑽したが帰郷して寺子屋の師匠となり、常に男五十五人女五人計六十人ほどの寺子があつた。躰は嚴格で毅然とした態度と侃々たる概を以て薫陶したと伝えられる。維新後は戸長役場に入り副戸長となつた。明治二十九年三月六十七歳で歿し、明治四十五年一月門弟相ばかり地藏堂に頌徳碑を建立した。

平澤義一 (一八六〇—一九二四)

ひらさわ
ぎいち

自治功勞者。明治十九年十一月宮田村新田に榮治郎の子として生れ、上伊那農業学校を中退して後、明治四十四年より同四十五年まで宮田村収入役を勤めた。その後は



青年会長・消防部長・村會議員等を歴任し、昭和病院設立委員・新田道路開發委員長・駒ヶ原耕地整

理組合理事・同組合副組合長を勤めた。この間に同地の百六十町歩の九割以上の面積の開田に多大の尽力をした。

昭和九年九月未曾有の大暴風雨の際、当時宮田村組合製糸の副組合長の現職に在り、同製糸所の煙突補強のため人夫を督励指揮中、組合製糸所女子寢室の屋根十数平方メートルが飛来して、その下敷となって即死、殉職した。これは彼の責任感の強大と誠実さの一面を物語っている。享年四十九歳。

平澤甲子三 (八六—一九三)

ひらさわ
きねぞう

自治功勞者、銅山経営者。元治元年十一月飯島宿(現飯島町)に嘉造の長男として生れた。幼少の頃高遠町の中村元起(別項)の塾に学び後東京法律学校に学び中途退学帰郷した。極めて侃々之士で地方自治のため奔走し、明治三十年三月より三十三年三月まで三年間飯島村長となり、正しいと信ずることは飽くまで貫き通す概を以て従来弊習を打破し治績をあげた。

後、郷を出て盟友中村弥六(別項)の幹旋によつて足尾銅山に入り重要なポストに就いていたが明治三十五年九月、三十九歳

で前途を嘱望されつつ逝去し惜しまれた。

平澤熊三郎 (八三—一九二)

ひらさわ
くまさぶろう

孝子。文政六年小出村(現伊那市西春近)上村の勘右衛門の二男として生れた。父は喜昌と号して農業のかたわら寺子屋を開き五十余年におよんだ。

熊三郎も父の薫陶を受けて、幼少の頃から和漢の学に励み、やがて昌喜と号して父を助け読み書きを教えた。明治五年西春近村小出に小出貫通小学が設立されてからは冬期間助手として、子弟の教育にあたった。

忠孝の道を説き、自からもよく親に仕え、明治七年十二月孝行の故をもつて褒賞せられた。明治三十四年十月七十九歳で歿した。大正十年秋多くの門人等によつて父勘右衛門の筆塚の近くに頌徳碑が建てられた。(頌徳碑)

平澤貞一 (八六—一九一)

ひらさわ
さだいち

行者。文政二年三月小出村(現伊那市西春近)東方の定右衛門の三男に生れ、幼名を貞弥と称した。天保三年西駒ヶ岳に駒ヶ

岳本社を再建。天保十三年分家して一家を構え、安政六年(八五)本社を改築し信仰に専念した。慶応二年大暴風雨のため大木が倒れ、山崩れで道路が崩壊し、地滑りがおこり人心が乱れた。これを見て道を開き、同三年辻の小屋を建設した。建立の時、大蛇が現われたが祝詞を奏したところ大蛇は徐々に姿を消したという伝説もある。上下伊那・諏訪の三郡に信者を募り、駒ヶ岳開闢講社を創立した。明治二年本社を改築し、同九年大鳥居を建立した。常に高山神域の尊厳を布教し、また地方を巡遊して神靈に依り患者の精神療法をして病魔を除いた。明治十三年十一月六十二歳で歿した。

平澤繁三郎 (八六—一九三)

ひらさわ
しげさぶろう

薬剤師。明治元年三月小出村(現伊那市西春近)の与五右衛門の二男に生れ、小



学校を卒えてから独学しつつ農業の手伝いをして十七歳の春まで家に居たが、明治十七年四月志を決

して東都に出、日本橋の医師橋爪助信の書生をしつつ薬剤師試験に合格したが薬学校に通学して明治二十一年六月卒業し更に同年八月東京医科大学薬学専科に入学し、同二十三年五月卒業。六月岡山県衛生試験場技師となり、第三高等学校講師を嘱託されて在職すること四年。明治二十八年五月衛生部附陸軍雇薬剤官として広島県似島検疫所に勤め、明治三十二年四月東京高等工業学校助教授となつて応用化学を教えた。またこの間石油製造の廃物から「イヒチオール」を得ることを発明し、特許を得て平沢イヒチオールと名付けて世に知られた。在職七年で官を辞した。

明治四十一年平沢化学研究所を独力で開設、人工集成法を発明し、東京三河島にイヒチオール製造工場を建設、以後年々輸出品の一つに数えられて販路が拡まり、社会に貢献するところが多かつた。其の他しばしば社会事業に尽力し、また郷里の子弟を東都に呼び寄せて勉学させ、就職の世話をして、多数の青年から仰慕された。大正十五年十一月五十九歳で歿した。

平澤素水 (七三—七六)

ひらさわ
そすい

画家。享保十五年、飯島宿(現飯島町)に宮下桃吏(別項)の子として生れたが、母が不縁になつたため、母の実家の糠屋平沢家に貰われ、後に別家した。通称を与太夫といひ古今堂または古今齋、素水と号し、身の不遇を悲しんで画を習つて自ら慰めた。後、京都へ行つて専ら狩野派の画の修業に専念して一向に帰宅しなかつたので、糠屋・仲屋等で再び書状をやつて、漸く帰途についたが不幸にも美濃中津川の宿で病死した。時に明和三年三月で享年三十七歳であつた。

御用を勤めていた小野組と取引関係のあつた縁故から、同組の番頭であつた木村浅治と談合、明治七年連判して器械製糸場を宮田の小田切河原へ建設しようと筑摩県へ出願した。小野組が経営した東京の築地製糸所は伊太利式であつたが、七年小野組は瓦解し製糸所も諸国に分散した。その一つが宮田製糸所であつた。上伊那最初の器械製糸所を創始したのが彼で、器械はもとより工女まで東京から連れて来たのは木村浅治である。明治二十年頃村内の同業者と協同して「産養社」を興して繰業したが、三十年頃破産して解散した。更に単独で「信産館」を興し、常に斯業の中心として盛況の基礎を造つた。明治三十四年一月七十六歳で病歿した。

平澤長造 (六六—九〇)

ひらさわ
ちようぞう

製糸業者。文政九年二月下平村(現駒ヶ根市赤穂)の農、小出品右衛門の三男として生れ、宮田村町割の平沢源蔵の養子となつた。明治四年蚕種製造の官許を受け、後、宮田村蚕種取締役を勤め、五年には宮田村副戸長になつた。当時大蔵省の爲替

平澤昌宗 (六三—五八)

ひらさわ
まさむね

自治功労者。文久三年十二月農、宇源治の二男として野底村(現伊那市)に生れ、幼名を冊二郎、雅号を竜城又は野竜と称し、長兄早世の爲家督を継いだ。幼時、



明道学校に学んだ

が、成績優秀で権参事渡辺千秋（別項）から褒賞を受けた。後師範学校小学師範科に学び、明治十二年卒業して直ちに明道小学校（上牧学校）に教鞭をとり、同十五年中等科教員の免許を受け、小河内学校・中箕輪学校を経て伊那尋常小学校野底支校に勤めた。三十四年小学校令が改正されて同校は伊那第二尋常小学校となり、校長に任ぜられた。独立前伊那小学校の小西校長に対し、学校の充実、特に教員の資格者採用について具申したがその中に、「当校の実際を見れば資格者二人、あと二人は准教員にもあらず代用にもあらず只の備員なれば全く教員を置かぬ学級があることになり法令勵行をいふ今日不都合なる次第なり」と、校長の人事に厳しく抗議している。この間、三十二年には新校舎の建築・学校林の設置・各種団体の輔導等教育の昂揚に努めた。三十七年五月病氣のため退職したが、前後二十二年間に亘って学校教育の為に努力した。

明治三十八年には伊那町学務委員に推されて、教育行政に参画し、同四十年には助役として町政に携り、続いて四十三年九月伊那町長の要職に就き、同四十五年退職し

た。その後、伊那社組合長・電水社幹事・上伊那生糸同業組合副会長等の公職に就いたが、昭和三年十二月六十六歳で歿した。（野底村誌、小学校沿革表、人物誌調査表）

平澤 要（八六—一九七）

ひらさわ しょう



官吏。明治二十四年四月西春近村（現伊那市）東方の金蔵の子として生れ、松本中学校（現深志高校）に入学したが中途から早稲田中学校に転じ、卒業後第一高等学校

校英法科に入学したが、病氣のため二年間郷里で静養して明治四十五年六月同校を卒業し、同年東

京大学独法科に入学、大正六年卒業して通信省に入り、事務官・課長・局長と次第に昇進、この間電気事業法の改正・電力の国有問題等に関係して活躍した。児玉謙次通信大臣の時通信次官となり、大臣退任に伴って退いたが、後大東亜建設のため中支那振興株式会社が中支に設立されるや児玉総裁の副総裁として上海に赴任し、国策事業の投資会社の経営に活躍したが、総裁と共に退任して帰国、やがて東京電力の

前身である関東配電株式会社の社長に推され、再び電力事業に関係することとなった。時あたかも世界大戦の戦時態勢下の事業の経営に当り、更に八月十五日終戦の日から関東一円の廃墟の復興に努めたが、当時労働運動が烈しく、電産争議の正面に立って経営者として苦闘した。次いで戦争関係者の追放・集中排除による財閥解体の嵐におそわれて関東配電社長を辞任、追放を受けた。

その後は自適の生活を送っていたがやがて追放解除となり、時に電々公社の外郭事業として電気通信共済会が設立されるやその会長に就任。厚生施設としての新しい構想に独創的な企画をもって運営にあたったがやがて病に倒れ、昭和三十二年五月六十六歳で歿した。

平澤 涼花（一九三—）

ひらさわ りょうか

安永天明ころの歌人・俳人。飯島宿の糠屋、宮下与市為直の長男で、通称与兵衛、諱は経重、涼翁、涼花また宗朴などと号した。和歌を、当時伊那谷の指導者であった依田梅山（別項）に学び、また俳諧は雪中庵二世桜井吏登に就き、蓼太・烏川

と親しく、夢太が施主となって、飯島の南端、与田切川の沿岸に雪塚を築き、雪中庵関係の句碑を建てたとき、これに協賛した。

。白妙の不易を積み雪の塚

天明三年七月歿した。なおこの平沢家からは夢宅門の歌人為香その妻直子、更に画家素水（別項）を出している。

（飯島村史）

廣瀬常雄（八五—一九四九）

ひろおせ

自治功勞者。明治二十八年高遠町に生れ、上伊那農業学校（現上伊那農業高等学校）を卒業、大正九年二十五歳で高遠町助役に挙げられて昭和二年まで八年間町長を



補佐し、よくその職責を果たしたので、その手腕は町民に認められ満期となるや続いて高遠町長に推挙

された。その後四期十六年間高遠町長の職にあつて種々の功績を挙げている。高遠の地が東部に偏在し、交通不便のため産業・文化・教育方面において、何れも天竜川沿線の各町村から取り残されていることを憂

い、道路網の整備を計るため伊那茅野線を改修し、西春近（現伊那市）沢渡—高遠線の新設などを行つて、伊那の幹線道路との連絡をよくした。また上伊那町村会長に選ばれ、上伊那農会長・上伊那農業保険組合長なども兼任した。昭和十年長野県会議員に立候補し、これに当選して県政壇上に活躍することになった。殊に農村民の生活向上

中等学校が無く進学希望の者は何れも伊那町（現伊那市）の中等学校に通学するより途はなかつたので、高遠に中等学校を造るべく、先ず高遠青年学校を拓殖青年学校とし、また女子教育の場として高遠実科高等女学校を創設するなど、青年教育向上のためにも力を尽した。

のために尽力し、県農会理事・県農業保険理事などにも挙げられた。上伊那東部地方が四面山に囲まれ、豊富な山林資源を持ちながら、これを素材のまま産出することを不利とし、高遠工業株式会社を創立してその社長となり、製材・製板をして東京及び関西方面に送出した。その他有限会社三協社・高遠庶民信用組合を組織してその社長又は組合長に挙げられるなど、上伊那東部の産業経済の前途を見透し、その中心とな

職を辞してから高遠工業株式会社の経営に専念していたが、当時東部の交通機関として伊那町（伊那市）高遠間を伊那自動車会社の自動車が行っているだけで、他の僻村の人々は交通に恵まれていなかったのが国鉄自動車導入の運動を起し、昭和二十三年、その運行の実現を見て、山奥の僻村まで国鉄バスの恩恵に浴することができるようになった。昭和二十四年春から病床に臥したが、同年六月五十五歳で歿した。

廣瀬白兎（一七六—一九四九）

ひろせ はくと

幕末の俳人。明和五年高遠町に生れ、名は之武、通称治良左衛門、松翁と号し、和歌には真猿、俳諧は鬼笑亭白兎などの雅号を用いた。高遠藩の町仕送役を勤め、苗字帯刀を許され、代々酒造業を営んだ。幼い時から文芸を愛好し、特に謡曲・俳諧・和